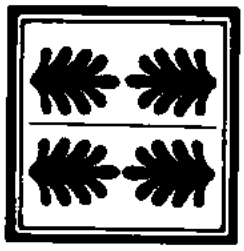
山岡荘八

織田信長（三）

侵略怒濤の巻



講談社文庫

織田信長(三) 侵略怒濤の巻
山岡荘八
昭和50年8月15日第1刷発行
昭和53年3月25日第9刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京 (03)945-1111(大代表)
振替　東京　8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国オフセット株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社若林製本工場

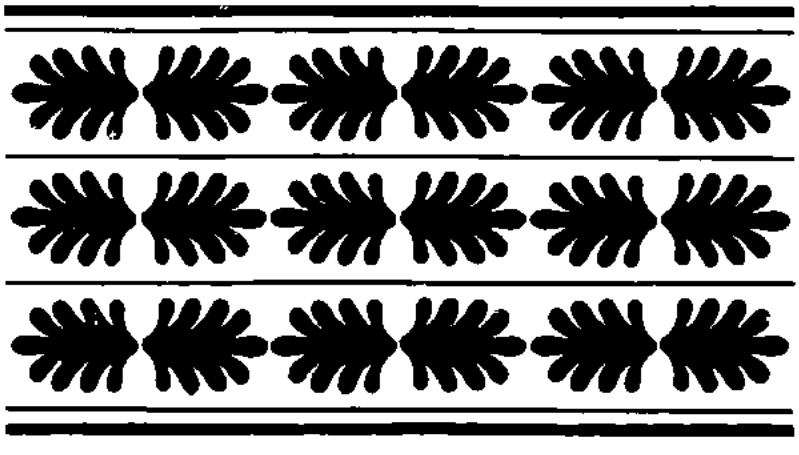
© Sohachi Yamaoka 1975
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

社文庫

織田信長(三) 侵略怒濤の巻

山岡荘八



講談社

織田信長 (三)

侵略怒濤の巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

出ずる星流れる星

信長は、濃姫が美濃へ潜入させてあったという女を連れて来ても、その方を見やりもせずに箸をうごかしていた。

季節は五月。

信長にとっては鷹野と遠乗りに絶好の青葉どき、余程腹を空かせて来たのであろう。立てつづけにもう七八杯は喰べているが、まだ箸をおこうとしない。

「殿……」

「なんだ」

「そろそろ言葉は耳に入りませぬか」

「入っている。こなたが貞節ぶって、わざわざ稲葉山の六尺五寸のもとへ、その女を忍ばせてあったというのだろう」

「それがお分りになりましたら、この者に言葉を下されませぬか」

「う……大儀であった」
そう云ってから信長は、
「しかし間諜の出入りはお互いでのう。おれの方のことも向うに筒抜けになって居る。おれが旅へ出ると、ちゃんと刺客がつけて来ていたからの」
「と仰せられると、この者も怪しいとおっしゃいまするか」
「まあよい。おれはもう美濃攻めをはじめているのだ。向うから、戻って来たというのなら褒美でも取らせて休ませておくがよい」
「殿！」
「なんじゃ。分っていると申すに」
「では、義龍が死んだこと、ご承知でござりまするか」
「なにッ!? 六尺五寸が死んだと……」
信長ははじめてぎくっと箸をとめて、濃姫のわきに両手を支えている女を見やった。
年齢は二十二三、いかにもおとなしそうな、それでいて、濃姫好みの丸い頬と知性に澄んだ眸をもった女であった。
「それはいったい何時のことだ」
「春のことと申しまする」
すでに日暮れで、縁の向うの空はまっ赤だ。
信長は火を噴くような眼になって、コトリと飯椀を下においた。
彼はこれまでに相手の気勢をそぐため、この十三日、一度美濃へ攻め入って、わざと大きな戦

は避けて引揚げて来ていたのだ。
こちらに準備がないと解すると、義龍はすぐにも侵入して来るに違いない……そう思えるに充分な美濃の気配だからであった。
「そ、そ、それはまことかお濃！」
「なんで嘘など申しましょう。鹿野は、義龍どのが最期を見届け、その子の龍興に、あやうく斬られそうになって命からがら遁れて来たのでございまする。なあ、鹿野」
「はい。奥方さま、おん仰せの通りにござりまする」
信長は、再びだまって箸をうごかし出した。
美濃は濃姫の故郷である。それだけに、信長の見知らぬ女を、姫の手でひそかに稲葉山城へ間諜として送りこんであったとしてもそれも敢てふしぎではなかった。
しかし、時も時、当の相手の義龍が、ぽっくり逝ってしまったとは、あまりにも話が巧すぎる。
（六尺五寸も、近ごろは仲々策謀がうまくなっている。うかつには信じられぬぞ……）
信長がそう思うにはむろん大きな理由があった。
信長が旅から戻ってみると、義龍は、彼が考えていたよりも、遙かに巧みな外交手段で尾張完封の備えを着々として施しつつあったのだ。
その一つは、信長と領地を接している、木曾川尻の長島にある本願寺との提携であった。
長島の本願寺は石山本願寺の別院で、中部日本における真宗の本拠として、侮りがたい兵力を持っている。しかも桑名三郎行吉や、伊勢の北畠氏とは親交を保っていた。

したがって信長が美濃と開戦したら、西南でそれらの策動が始まりそうだったし、北東の武田氏とも秘かに連絡を計っているらしかった。

近江の新興勢力浅井氏と結ぶために、嫡子龍興の嫁をそこから迎えていたし、国内の結束も信長の田楽狭間の勝利を警戒して、かつてないほど強固なものになっていた。

関の城には長井隼人正。

加治田の城には佐藤紀伊守。

鵜沼の城には大沢正重。

猿啄の城には岸勘解由。

軽海の城には長井甲斐守。

鷺山の城には日根野備中守。

森部の城には日根野下野守。

その他に、美濃の三人衆と呼ばれる福寿美濃守、氏家主水正、安藤伊賀守などの人物ががっしりと西をおさえていた。

（これは、簡単には破れないぞ……）

ひそかにそれを苦慮しているところへ、何と！　ポックリ義龍が死んでしまったというのではなかったか……

これでは余りに話が出来すぎている。

以前にも重病人を装って、濃姫の実弟二人を鷺山城に呼び寄せ、その場で討取った義龍なのだ。

（臭い……事によると、この女、逆に義龍の間諜かも知れぬ）
そう思うと、信長は皮肉な笑いではじめて女に向き直った。
「そうか、それでは美濃一国はおれが貰ったも同じことだ。いつ攻め込んでもいいというわけか」
「恐れながら、そのようには参らぬかと存じまする」
鹿野は顔をあげると、はっきりとした口調で云った。
「なに六尺五寸が死んでもか」
「はい、実は、義龍さま、毒飼いは、尾張の殿の陰謀と解され、そのためご家中の結束はいっそう強固になってござりまする」
「なに、すると、六尺五寸は、病死ではなかったのかお濃……」
濃姫は、女の言葉を信じきっている様子で、
「鹿野、こまかく当夜の模様、殿のお耳に入れて下され」
「は……はい」
女は怯えたように、そっとあたりを見廻して身震いしながら話しだした。
それに依ると、鹿野と二人、義龍のそばに仕えて来た小寿江は、実は道三生前の廻し者だったのだという。
しかし、これは決して義龍を毒殺するために附けられて来たのではなく、その反対だったと鹿野は云った。
「――いつか、あのうつけ者も眼が覚めよう。いや、眼など覚めずともよい。こなた義龍の手文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

庫にこの薬を入れておいてやれ。あやつはな、親のわしを欺そうとしてあの業病を装うて居る。が、たわけ故、いつか或いはまことの病になるやも知れぬ。というのは、あやつ、わざわざ業病を持った者に近づいて、その身ぶり動作を真似て居る。癩はもともと伝染る病と知らぬ故近づくのじゃ。よいか、それゆえ、もし発病せなんだらそのまま捨ておいてもよいぞ。しかし、もし発病した節には、それとなくこの薬があやつの眼につくように計ろうておくのだ。眼についたら、いかに拗ね者でも、親のこころは通じるものゆえきっと服用する気になろう。その時にはなあ、これは劇薬ゆえ、決して一度に呑まぬよう、よいか、七つに分けて一日おきに十四日の間にのましてやれ。その折には、こなたが、わしに命じられて、仕えて来たのだと打明けてやってもよい」

道三はそう云ってから、例の冷徹無比な笑い方で、

「その時には、この極悪人の道三はあやつの手にかかって死んでいようが、殺された父親の、これが愛情だと聞かしてやれ」

嘯くように云ったという……

「鹿野と申したな」

信長はまだ相手を信じる気にはなれず、

「では、六尺五寸め、その劇薬をいちどに呑んで死んだというのか」

「はい……小寿江どのが、或いはほんとうに病にかかられたのではあるまいかと、案じだしている時に、思いもかけず……」

「ハハハ……して、小寿江と申す女子、なんでまた、そのような大事な話を、こなたに打明けた

のじゃ」
「はい……あのう、それは……」
「それはどうしたのじゃ。顔の色が変って来たぞ」
「それは……あのう……」
「道三ほどの大蝮(まむし)が、死後を托してゆくからは、その小寿江とやらも女丈夫(じょじょうふ)中の女丈夫であろう。それが、何で、そのような秘密をそなたに洩らしたのじゃ」
すると、鹿野はいよいようろたえて、
「その事も……申上げねば……」
「いや、云いたくなくば云わずともよいぞ」
信長はすーっと立って、もう一度笑った。
「おれは、幽霊でもよい。とにかく美濃へ討入って、六尺五寸を討取るからのう」
そしてそのまま、さっさと濃姫の居間を出ていった。

幸運活用

濃姫が、鹿野の自殺を告げたのはその翌朝だった。
信長は、その夜は表の寝所でやすんで、朝になって濃姫の居間へゆくと、
「殿！」
濃姫は、ゾーッとするほど青く硬ばった表情で叱りつけるように話しかけた。

「殿は、尾張一国の太守が、せいぜいのお方でござりまするなあ」
「なんだと、また血の道かこなたは」
「わらわは血の道、殿は腰抜け……それで織田家の先も見えました」
「お濃！」
「なんでござりまする」
「こなたの鼻は、秋葉山の天狗に似て来たぞ」
「蝮の娘が天狗になれば大した出世。殿はまた、だんだんふくろに似て来ました」
「ふくろ……!? ふくろとは何のことだ」
「お日さまの前では目が見えないということでござりまする。目の見えぬ鳥に何で天下などが……」
「お濃！」
「ホホ……、その声ほどに、眼も大きくお開きなさいませ」
信長はニヤリと笑った。
相手が自分を怒らせようとしている。他人が怒らせようとする時に、怒るような、そんな素直な臍は持って生れて来ている信長ではなかった。
「そうか。目の見えない鳥かおれは……そう云えば、そなたの顔もハッキリせぬわ」
云いながらぐっと大きく眼玉をむいて、
「耳糞！」と、信長は叫んだ。
「膝を出せ。除れっ耳糞を。眼の見えない上に、耳も聞えなくては、あの鹿野とかいう女に寝首

をかかれるわ」
云いざま、いきなり、濃姫の躰を、ぐっと自分の方へねじ向け、そのまま上体を投げ出して膝をまくらにしてしまった。
濃姫はかすかに震えている。震えながら、しかし、耳かきを取って信長の右の耳を手きびしく引っぱるより他になかった。
憎いのである。が、愛おしくもあった。こちらが怒っていると分ると、
「――話せ。聞こう」という代りに、耳糞を掘れという。それでは怒りがそらされて、頬ずりしたくなるではないか……
「さ、大きいのを除りましたぞえ」
「聞える。何だ。云えお濃」
「鹿野は死にました」
「なに……誰が死んだと!?」
「鹿野は、殿に疑われて、今朝自害して果てました。あのような正直な女子一人の心を見抜けずそれで天下を取ろうなどと……」
信長はくるりと顔を上向けて、濃姫の口を下から掌で蔽っていた。
「余計なことは云うな。なぜ死んだのだ。それだけ云え！」
「殿が、訊かいでものことを訊くゆえに」
「訊かいでものこと……」
「殿！」

「なんじゃい、その鬼のような顔は」
「鹿野はなあ……長い間、義龍のそばにいる間に、義龍を愛するようになっていた……と、心付かれませぬか」
「それと、おれと、何のかかわりがある？　おれは蝮の眼鏡に叶うほどの小寿江という女が、なんで、蝮の秘命を鹿野に打明けたかと、それを訊いたのだ」
「それを訊いた時に、鹿野はまっ赤になってうろたえた。それが、殿の眼には見えなかったのじゃ」
「まっ赤になってうろたえた……？」
「そうじゃ。鹿野は、小寿江に嫉妬を感じ、多分小寿江を刺そうとしたのに違いない。それで小寿江は、わが身を守るため、わらわは亡き道三の云いつけで、やむなくお傍にいる身ゆえ、憎んで呉れるなと打明けたに違いないのじゃ」
「ふーん。それならそれをなぜ云わぬ」
「云えることかそのようなことが……あれは、この濃のつけた女細作、それも男を知らぬ処女の身からではございませぬか。ご覧なされませ、これが、鹿野の書きおきじゃ」
濃姫につきつけられて、信長はそっとそれを寝ながらひらいた。
なるほどそこにはいじらしい、純な女の苦悩がめんめんと書き残されている。
間諜でありながら相手を愛していた自分は恥しい淫奔娘なのではあるまいか……そのため義龍の死を信長さまに疑われた……申訳ないと書いてある。
（なるほど、こう考えていたのでは、嫉妬のために小寿江を刺そうとし、それで小寿江の素性を

知ったのだとは人の前では云い得まい……）

最後に――これで自分の仕事は終ったゆえ、自害して、義龍のもとへ行く、それを許して下さるように……と、結んであった。

「殿！　……」

「ん……」

「濃は女子ゆえ、女子の哀れさは身にしみて知っています。その濃が、女子一人を犠牲(にえ)にする気で、義龍のそばに鹿野を送った……その意味が、殿にはお分りなされまするか」

「父の仇を討たせる気だったのであろうが」

「違いまする！　蝮に親子の仇討などなくてよい」

「と、云うと、何のためだと云いたいのだ。この女天狗め」

「殿に……殿に……こんなに悲しいこの乱世を、早く無くして貰おうためじゃ。義龍の挙動をよく探り……寸時も早く、この世を戦の無い世にして貰おうためじゃ」

そう云うと、濃姫は、たまりかねたように良人の上へ身をかがめて泣きじゃくった。

信長は、しばらく息を殺して身動きもしなかった。

もはや義龍の死を疑ってはいなかった。

むろん一人の女の死に、前後を忘れる信長ではない。が、同時に、またこの悲しい犠牲の累積に、平然と無感動な信長ではなかった。

（そうか。義龍は死んでいったか……）

死んだとなれば、彼の計画もまたおのずから修正されなければならない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com